

認知症ケアにおける新人介護職員のコミュニケーション課題の改善 回想法とライフレビューブック作成からの一考察

○玉置三奈代（一笑），牛田篤，下山久之

《研究の背景》 新人介護職員は，介護福祉士等の資格取得の講義や入職先の研修において，認知症ケアに関する知識と技術を学んでいる。しかし，認知症高齢者（以後，利用者）に対して，本人本位の認知症ケアを行うことは容易ではなく，主に利用者とのコミュニケーションが課題となる。そこで，本研究では認知症ケアにおける新人職員のコミュニケーション課題の改善に焦点を当てる。

《目的》 本研究では，認知症ケアにおける新人介護職員のコミュニケーション課題の改善について，回想法とライフレビューブックを作成し，それらの実践からの一考察を報告する。

※回想法とは，本人が思い出を語り・人生を振り返るなかで，今後の人生を捉える心理社会的アプローチである。また，認知症の非薬物療法や介護予防の一手法として用いられている。

※ライフレビューブックとは，回想法を用いて作成する自分史のことである。表1-1参照

《方法》 対象：A県B市C特別養護老人ホーム，利用者2名。新人介護職員2名。期間：平成24年10月～平成24年12月。調査方法：①下山久之による回想法とライフレビューブック研修（以後，外部研修）を新人職員2名が参加（10月，12月）。次回外部研修までの期間内に対象の利用者のライフレビューブックを作成。②前述の課題を整理。③一連の実践に関する改善の考察（12月）。②，③の際，共同研究者とディスカッションしながら実施。

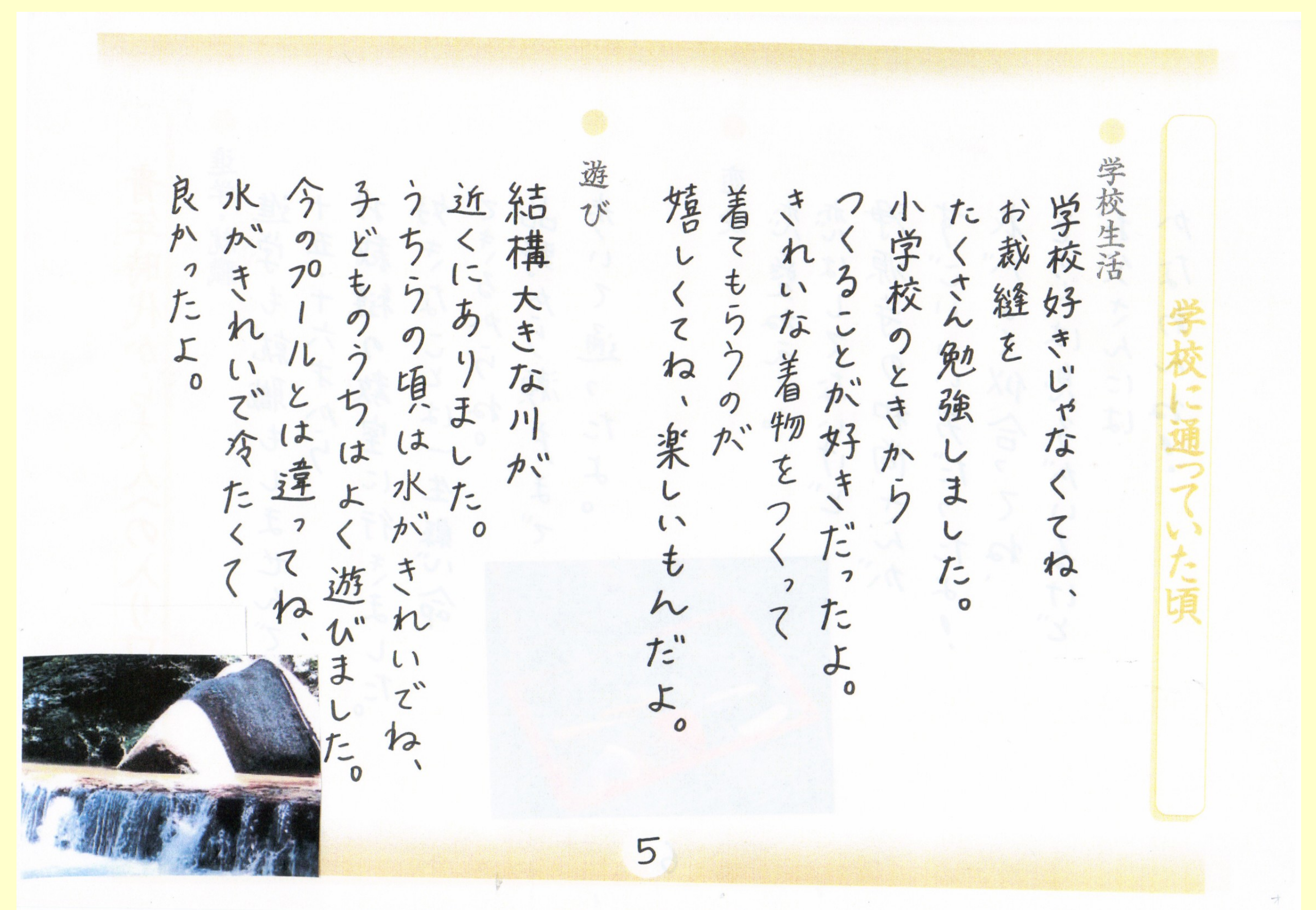
【倫理的配慮】 本研究に先立ち，施設管理者，対象者へ説明を行う。同意を得て実施。発表の際，固有名詞は使用しない。個人情報に対して十分に配慮する。

《今後の課題と展開》

本研究は一考察の為，今後も利用者とのコミュニケーションにおいて，回想法とライフレビューブック作成を用い，実施前後の比較分析を行う必要があると考える。そして，実施する際，倫理的配慮を意識しながら，本人の語る言葉一つひとつを大切にされた受容，共感，傾聴の聴く姿勢が必要である。

《結果》 課題の整理から，新人介護職員は入職間もないと「何を話せばよいか悩む」「業務を優先する傾向となる」「排泄や入浴の声かけが基本となる」等の聴く姿勢が軽視される内容が抽出された。一方，回想法を通して，利用者は主体的に生活歴を語ることが出来た。ライフレビューブックを作成することで，利用者から感謝される様子が観察された。新人介護職員にとって，利用者の生活歴や本人の気持ちを傾聴し，受容，共感することで，前述の課題を改善する機会となった。

表1-1ライフレビューブック一例



《考察》 本研究から，利用者と新人介護職員の双方にとって，回想法とライフレビューブック作成は，良好なコミュニケーションを可能とし，前述の課題改善の糸口として有効な一方法であると考える。一方，本研究から回想法を用い，ライフレビューブックを作成する際，外部研修に参加し，回想法の基本的な知識と技術を学び，実施したことが重要であったと考える。回想法は，その人の大切な思い出を語っていただく為，その人の生活歴やお互いの信頼関係に応じて聴く内容に配慮する必要がある。そして，その聴く過程において，過去から，現在，未来の生活に活かす機会として繋げることが重要である。よって，実施者の受容・共感・傾聴の聴く姿勢が大切である。